

〔研究ノート〕

ガイダンスと電子メール

—同報通信によるプロセス確保—

松尾欣治

目次

はじめに

1. 大学の現状と挑戦
2. 専門の枠とコンピュータ
3. コンピュータと学びの逆転
4. 「世間論」とコンピュータ
5. 電子サロンの立ち上げ
6. ガイダンスとは何か
7. 電子サロンの世界

おわりに

ガイダンスと電子メール

—同報通信によるプロセス確保—

松尾欣治*

はじめに

高校教育と大学教育の接続の問題は、大学教育そのものの成否にかかわる最重要な問題の1つである。しかし、この接続の問題は、一般に認識されているレベルを遙かに超える重要性を秘めている。大学教育の問題そのものであった、とさえ言える。

だが、この問題に、新たな事態が加わった。コンピュータ、英語、PHS（携帯電話）という大学生がその必要性を痛切に感じているか、または、すでに所有している機器およびその運用能力を抜きに、もはや今日、こうした問題を論じることはできない。その事態変化はあまりにも急激で、半年で、事態が一変してしまうこともありうるほどである。

たとえば、インターカレッジで、オープンで、社会人も参加できれば、父母も、高校生もオブザーバー参加できる場など、いままで想像できただろうか。まして、そんな場を創造できただろうか。むろん無理をすれば、やってできないことはなかったろう。しかし、いまは容易に、しかも気楽に、そういう場が創造できてしまう。

いまこそ、大学は開かれた。閉じようにも閉じられない、そんな形で大学が開かれたのである。大学生が大学生であるのは、どんな基準によってか？ 研究者が研究者であるのは、いかなる能力によってか？ そして大学教育における教授の役割とは何か？

大学の自己点検・自己評価は義務的色彩が濃い。そうした点検・評価を嫌う側にこそ、こうした義務は課せられる。だが、これを義務とは感じない立場もある。第三者からの正当な評価を積極的に求める立場である。そういう立場にとっては、煩わしい作業を伴うにしても、これらは望むところだろう。にもかかわらず、こういう立場にとっても、大学の自己点検・自己評価によって「受け身」の立場に立たされる不自由は、なんとも情けない事態だ、と言わなければならない。

いま大学教育にとって必要なのは、正当な評価を獲得しようとする積極的果敢な挑戦である。教育成果を点検してもらい、その評価を「受ける」ことではない。挑戦あつての結果である。とすれば、挑戦から結果に至るプロセスの全体を同時進行で評価されつつ、しかもアドバイスを受けつつ、参加者の多くが「成功だった」と納得できるまで、あらゆる知識を投入して、知恵を絞るプロジェクトが成り立つはずである。

本稿は、そうした挑戦の中間報告である。従来の議論の流れからすれば、この挑戦は、教養教育と専門教育の対立を発展的に解消させるべく、電子メールを使った、いわゆる「同報通信」の手法で下から上へと螺旋上昇させる「ガイダンス」を成立させる試み、ということになるだろうか。これは

*玉川上水学術（広島大学 大学教育研究センター 客員研究員）

組織活性化の観点からすれば、「企業内起業家」という考え方の大学版とも理解できるかもしれない。

なお、本稿は『大学論集』第24集に発表した「私塾からの風景—大学の原点確保の試み—」に、コンピュータを導入した続編である。対象は4年制人文・社会系大学とした。

1. 大学の現状と挑戦

新入生は入学すると、なんらかの形でガイダンスを受けることになる。高校的なものから卒業して大学的なものに馴染む、そのプロセスが、高校教育と大学教育とを接続するガイダンスである。だが、この、実際に入学した大学・学部・学科に馴染むことを「危険」とする意識が、大学生の側に働いていることが多い。いわゆる「不本意入学」に分類される大学生の意識である。

これは受験生時代の人気大学・学部・学科への憧れが、受験生のまま、大学生になっても消えないことを意味している。この憧れが残っていると、大学生には成り切れない大学生が誕生する。彼らは意識するにしろ無意識にしろ、大学生であって”ほんもの”の大学生ではない、という”にせもの”意識に苛まれることになる。

だからこそのガイダンスであり、高校教育と大学教育との接続はありきたりのガイダンスでは済まない重要かつ複雑なものだ、との認識に立つのがガイダンス教育なのであろう。

だが、その後の大学生の行動から見ると、サークル、アルバイトに熱中することによって高校的なものから実感として脱皮することはできる。問題は、学問による高校的なものからの脱皮がゼミナールが本格化する3年次まで待たされ、3年次の後半からは、早くも就職ガイダンスが始まるという、その慌ただしさにある。4年間は、あまりにも短い。大学教育がほとんど機能することなく卒業を迎え、自身のあまりの成長のなさに呆れ慌てふためく大学生も、また夥しい数に上る。

さらに、学際化・国際化が叫ばれ、各専門の境界が曖昧になった。縦割りの学部教育自体が時代に遅れてしまっている。大学生が求めているコンピュータと英語の2つの能力に関しては学部間の違いはなさそうであるが、このたった2つに対する大学の対応も緩慢で、大学生をガッカリさせているのが一般である。

以上が、今日、日本の平均的大学の現状だとすれば、すぐに気づくのは、これでは大学生に学問的な「チャレンジをする」余地がほとんどない、ということだ。チャレンジ精神を発揮するとすれば、その場を学内にあってはサークルに求め、それがだめなら、学外に求めざるをえない。短期でも海外の大学への留学が許されるなら、即座に、日本脱出である。資格と語学力を求めるダブル・スクール現象を考えてみても、頼りにならない大学教育によって満たされない不足の穴埋めである。

なぜ、こんなことになったのか。それほどまでに日本の大学を魅力のないものにしてしまった原因は何なのか？ 教授たちは自らが果たさなければならない役割を放棄しているか、あるいは、その役割に気づいていないのではあるまいか？

この辺りの領野を掘り起こすには、ガイダンスおよびガイダンス教育とは何であるか？そして、その可能性を問うことから始めるのも1つの有効な方法である。実は、高校教育と大学教育とを接

続するガイダンスまたはガイダンス教育は、入学の前後をスムーズに接続すれば事が済むようなものではなく、もっと広く考えるべきものであったのではないか？

今回のプロジェクトの成果からすれば、過去には高校教育、中学教育、小学校教育へと遡り、未来へ向けては、大学院を含む大学教育の全体を、さらには日本社会、世界を視野に納め、そこから「この大学、この学部、この学科で学ぶことの意味が、新入生個人が自らの可能性を拓こうとする具体的”挑戦”が可能な形で問われる」場の確保、それがガイダンスであり、ガイダンス教育であるべきだったのではないかと考えられるのである。

2. 専門の枠とコンピュータ

時代が大変革期に入った。古いものが容赦なく捨てられ、新しいものが台頭してきている。パーソナル・コンピュータが、その台頭してきた代表的な存在である。しかし今回の大変革は専門の境界を無意味化しつつ進行している点で、大学教育を直撃していると言ってよい。専門の鎧を着ていたのでは、時代の変化に置いて行かれてしまうのである。

大学で行われている学問には、それぞれ蓄積された成果があり、基本がある。それらを前提としなければ、先へは進めない。従って、専門教育そのものは依然として成り立つ。

ところが、この専門教育が成り立つ前提というものが新たに想定・確保されなければ、この「専門教育は依然として成り立つ」という議論は成り立たなくなった。時代が大変革期に入ったとは、大学で行われている専門教育の全体に限定を加える新たな枠が発生したことを意味しているからである。

事態がこうであるとする、全体が見えぬまま部分である専門を講じるだけというのは賢明ではない。少なくとも、それで授業が成り立つとは考えられない。隣接した専門領域で、専門の境界が崩れたのではなく、学問の総体が収斂し、ビッグ・バンを固唾を飲んで待つ、そんな状況にあるのが、今日の学問状況である。

このような時には「試行錯誤」、つまり挑戦と、その結果に対する謙虚さが尊ばれなければならない。しかし物事に対する、このような態度は、研究者の特性ではない。こどもも、大学生も、社会人も、誰でも、こうした精神態度を尊び、かつ実践するのが理想とされている。

だが、大学の授業に、こうした挑戦と謙虚さが、大学生が納得する形で認められるだろうか？ 認められるにしても、狭い専門の枠がこうした試行錯誤を許さない弊害の方が目立つ、この認識が実態に近いのではあるまいか。

確かに専門を講じるからには、その専門の形を現さなければならない。その形が専門の輪郭を生み、その輪郭が専門を専門ならしめている枠となる。そして今日、最大の学問的課題は、その枠を突破し、各専門を超えた、より大きな学問の有様をスケッチすることなのである。

このような学問の大変革に立ち会っていながら、大学生が知的興奮を覚えないとすれば、それは事態を知らされていないため、としか考えようがない。これを大学生の迂闊とすれば、この迂闊によってもたらされた遅れは、社会人になってすぐに苦悩に変わるだろう。

社会の変化が読めなければ、ビジネスが成り立たない。パーソナル・コンピュータの出現に社会人が慌てたのは、それが時代の大変革をもたらした当のものでありながら、同時に、そのパーソナル・コンピュータそのものがその大変革期を乗り切るための情報を手に入れ、発信する手段、つまり、新たな時代を拓く道具でもあったからである。

3. コンピュータと学びの逆転

私がコンピュータを導入したのは、もう15年も前のことである。いわゆるワープロでパーソナル・コンピュータではなかった。ワープロを使ってしまうと、パーソナル・コンピュータは不要にも思えた。ところが、ある日、突然、パーソナル・コンピュータが窓から侵入してきた。近所の友人が運び込んだのである。正月休みに友人は私を仕込み、3日でワープロ派からパソコン派に変えてしまった。「これからはワープロでは、生き延びることができない」が、その理由だった。

秋になると、大学院生が「パソコンをもっているなら電子メールを始めなさい」と、ほとんど命令に近いアドバイスをしてくれた。彼も私を仕込み、3時間で電子メールが使えるようになった。

この3日と3時間が、その後、どのような意味をもつことになるのか、その時の私には想像がつかなかった。いまにして思えば、大学の教師像が崩壊していた。一方的に教える行為の時代は終わり、助け合い学び合うなかで共に時代を拓いていく、そんな新しいスタイルの学びの時代が始まっていたのである。

ここは大学の英語教育と比較して説明しよう。40歳代半ばの私でも、3日と3時間でパソコン通信ができる、という事実そのものには大した意味はない。英語教育が行われ、英語教師がいて、大学生の側も英語をマスターしたいと切望していながら、大学英語はするよりも、むしろしないほうが大学生の英語力が伸び、これを行うと予想とは逆に、英語力が低下する。

なぜこんな信じがたいことが日本の大学で起こるのかについては、かつて忍耐の限りを尽くして解明したところであるから¹⁾再論は控えるが、この問題は、英語教育を取り巻く環境にまで考察を広げなければ理解できない。単に英語力の優れた教師を採用しても、事態を変えることはできない。同様に、コンピュータを導入して、コンピュータの指導員を採用、コンピュータ教育を行っても、それだけでは、大学生がコンピュータをマスターすることにはつながらない。

ところが、英語教育とコンピュータ教育との間には決定的に違っているところがある。それは、コンピュータの場合は英語教育におけるネイティブ・スピーカーに相当する人材が必要とされない点である。少しでもコンピュータができれば、まったくできない初心者の手ほどきができるし、また、こうしてコンピュータは社会に浸透してきた。むしろ、ちゃんとした講習が受けられるチャンスがあれば、喜んで講習に参加するのであるから、コンピュータ教育が不要だ、というのではない。

注目しなければならないのは、少しでも余分にコンピュータに関する知識・技能を有する者が即席の教師となって惜しみなく教える、その学び合い・教え合いの態度である。ここには教育の臭いがなく、仲間意識が働いた「助け合い・学び合い」が行われているだけなのである。さらに、コンピュータは若い人たちの得意とするものであるから、年齢的に教師と生徒の関係が逆転する。この

逆転こそが、実は、日本の大学を再生させる上で貴重な契機を与えていた。

4. 「世間論」とコンピュータ

個人主義の社会では、大人になるルートはいろいろある。決して1つではない。ところが日本の場合、単線型の教育制度を採用したことも手伝って、大学を出て社会人になるのを理想とする風潮を強めた。だが、国際性を前提とする大学にあって、日本人が大学で学ぶことにより大人になるについては、あまりに難しい勉学を要求されてしまう「日本文化」という壁があった。阿部謹也氏が言うところの「世間」が、それである²⁾。

「世間は人間関係の世界である限りでかなり曖昧なものであり、その曖昧なものとの関係の中で自己を形成せざるをえない日本の個人は、欧米人からみると、曖昧な存在としてみえる」³⁾

「わが国においては、個人の意識はこの百年の事態の推移にもかかわらず、十分な形で確立しなかった。(中略)したがって社会という言葉は、そのような事態を反映して、個人の尊厳とは切り離されて法、経済制度やインフラの意味で用いられており、人間関係を含んだ概念とはいまだなっていない」⁴⁾

「日本の社会は決して西洋のやうに主義を唱道したり、支那のやうに節義を固持する処ぢゃない。善悪を問はず少しでも際だった人格を見せたなら早速失敗してしまふ」(永井荷風)⁵⁾

このように阿部氏が相対化し、事例を示した世間は、欧米の社会と比較検討できる対象であって、社会は世間と、世間は社会と同じではない。阿部氏によれば、「アメリカには、日本のような世間はない」⁶⁾ということになる。

留学生および帰国子女は、日本の大学の世間で大変な苦勞をする。単に自分の考えを意見として言っただけなのに”出しゃばり”とされてしまったり、時には相手から”喧嘩を売っている”と誤解されることさえある。むやみに授業を活性化してはいけなかったのだ。

しかし日本人の大学生も、留学生、帰国子女と同じように別の苦勞をしている。高額の学費を払っているのに英語力が低下し、仕方なく学外の外国語教育機関にさらに学費を払い、アルバイトに明け暮れ、勉強する暇がない。私学に学ぶ大学生が怒り出さないのが不思議なほど、大多数の日本の大学生は、貧しい勉学環境のもとで学んでいる。

この貧しさをもたらした責任は大学生にもある。日本の教育が批判的に論じられるとき、その最大の難点は、大学入試にあるとされることが多い。これは間違った認識だろう。なぜなら、家庭の経済状況が許すなら、まずは大学に行くべきなのであり、それは半ば強制として受験生に受け取られ、この強制に耐えたご褒美として、大学で遊ぶ権利が発生する。人間性を回復する名目で、遊ぶ義務があるとも言われる。サークル活動に潜む陥穽が、ここにはある。

以上は大学に学ぶ権利を行使するために、大学に入り、大学で勉学するのは明らかに話が違っている。教授する側は大学生に学ぶ権利の行使、つまり授業への積極的な参加を期待するが、大学生の側に大学で遊ぶ権利が発生している必然についての配慮にまったく欠けているのが一般である。配慮以前に、どうしても問題が捉え切れないのだ。

そのため、大学生の学ぶ権利の行使が待ちきれずに、まず教授する側が「教える義務」を強引に履行する。ところが、この強引な義務の履行は、大学生の側から見れば、教授する側の「教える権利の行使」としか思えない。この学ぶ側の主体を無視した授業なり、講義なりが、大学生にとって楽しいものであろうはずがなく、ここに私語が発生することになる。この私語発生メカニズムについても、すでに解明したところであるから、再論は控えよう⁷⁾。

こうしてみると、大学生が日本の大学で積極的に学ぶことがいかに難しいことであるかを、改めて思い知る。自然発生するかに見える大学生の「遊ぶ権利」を「学ぶ権利」に転換するのは、「悪貨が良貨を駆逐する」グレシャムの法則に対抗して、「良貨が悪貨を駆逐する」原理原則を打ち立てるようなものである。個々の大学生の金の含有率をどうやって高めるか？ この発想によって初めて、大学教育はその成立の文脈を確保する。

ここまで考察が進んだ段階で、パーソナル・コンピュータが登場したのである。それは教育の臭いがなく、仲間意識が働いた「助け合い・学び合い」を当然のこととする環境が整備されたことを意味する。さらに、阿部謹也氏は「欧米の社会という言葉は本来個人がつくる社会を意味しており、個人が前提であった」⁸⁾としているが、パーソナル・コンピュータが可能にした電子メールの同報通信の世界、インターネットの世界は、個人がつくらなければ成り立たない社会そのものなのである。

ニコラス・ネグロポンテは、その著『ビーイング・デジタル』の日本語版に「日本の読者の皆様へ」というメッセージを書いて、次のようにインターネットが日本の社会に与える影響を示唆している。その当否は別として、世間を対象化する動きとインターネットとが重なり通底していることは間違いないように思う。

「学校は楽しい場所でなければならない。子どもを間違った競争に駆り立てて個性を殺してしまうような教育は、もうそろそろ終わりにすべきだろう。もしあなたがお子さんをお持ちなら、自分の人生を振り返ってみたい。あなたが仕事をし、生きてきた道は、本当に正しかっただろうか？ 道は一つではなく、ほかにもあるはずなのだ。デジタル化はそれを改めるいい機会なのだ」⁹⁾

5. 電子サロンの立ち上げ

個人的な高等教育研究の出発点は、私の場合、大学入学直後に「高校的なるもの」を察知したところにある。日本の大学は大学である前に「学校」なのだった。なぜ大学に入ったのに高校に再入学しなければならないのだろうか。この疑問は、この種の疑問を抱くことが「不本意入学」と誤解されかねない点において、きわめてやっかいなものであった。また、屈辱的でもあった。

この屈辱と日本のこどもたちに与える不幸な影響を考え、ジャーナリズムの原点とも言われる

B・パスカルの『プロヴァンシャル』をモデルに執筆を開始したのが、大学2年の時だった。日本の大学を学校にしてしまう「からくり」が見えたのである。しかし見えるのと、それを第三者にも理解できるように著作することと間には、あまりに遠い距離があった。

こうして歴史を動かしたとされる古今東西の名著という名著を分野を問わず渉猟することになったが、なかでも、なぜかJ・J・ルソーが気になった。いまからしてみれば、それも当然で、ルソーの『社会契約論』は、日本の大学においては、次のような形をとることになる。

「大学生は自由な者として大学に入学した、しかも至る所で鎖に繋がれている。自分が学生の主人であると思っているかに見える教授たちも、実は学生以上に奴隷なのだ。どうしてこの変化が生じたか？ 私は知らない。何がそれを正当なものとするか？ 私は、この問題は解きうると信じる」¹⁰⁾

「大学という語の真の意味は大学生の間では、ほとんど全く見失われてしまっている。大学生の大部分は大学をキャンパスと、また大学に行き交う若者を大学生と取り違えている。彼らは校舎がキャンパスをつくるが、大学生が大学をつくることを知らない」¹¹⁾

この大学版に書き直した『社会契約論』は、阿部氏の世間論、N・ネグロポンテの『ビーイング・デジタル』、カレル・ヴァン・ウォルフレンの『人間を幸福にしない日本というシステム』¹²⁾、浅羽通明氏の『大学で何を学ぶか』¹³⁾といった話題の書が準備したものに、明治時代、自由民権運動を惹起したのと同じような刺激を与えることになる。

これは大学改革の話であって、もとより政治の話ではない。しかし大学生が沈黙しているから、大学改革の話に関心を示さないのではない。大学生が関心を示しても仕方がないような形でしか、大学論議は行われていない。大学改革だか改善だかの結果が示され、あとは、「これだけ予算を使い、設備を立派にしたのだから、せいぜい勉学に励んでくれよ」ということなのだ。下界を見下ろす雲上人の発想である。

大学生は設備で学ぶのではない。設備を使い、互いに学ぶ環境を整えつつ学ぶ。つまり、大学生が自分たちの大学時代を自らの知恵と力を束ねて築かなければ、大学が大学らしき獲得することはなく、奴隷状況が出現してしまうのだ。

従って、大学生がサークルに熱中するについては訳があり、興味のある学問分野で燃えられなければ、サークルでもアルバイトでも、とにかく自分を燃やす必要があるのである。そして自分の、自分たちの大学時代を築いていく。自分たちの時代を築くのであるから、フット・ワークよく、エネルギーでなければならない。

そのフット・ワークのよいエネルギーな大学生たちが、友人が開いてくれたささやかな出版記念パーティーに駆けつけてくれた。1996年4月のことである。彼らは私の母校の後輩たちなのだが、「たまには母校の話をしましょう！」という提案を受けて、その場で始まったのが、世間や人間を不幸にする日本というシステムからの脱出を敢行する独立戦争（シヴィル・ウォー）だった。

英語では CIVIL WAR は南北戦争のことだが、大学の奴隷状況を呈する部分を南軍として戦い、この戦いを世間および大学間序列から脱出するプロセス確保とした。南北戦争ではなんのことだか分からないので、世間および大学間序列から自由を獲得する戦いの意味でプロジェクト名を独立戦争（シヴィル・ウォー）としたのである。

この辺りのノリは生真面目な方々には理解しにくいらしいが、たとえば、教授たちが不用意に言う「年々、学生の学力が低下している」といった言葉は、具体的に事態をどう改善するのかを、夢・希望としてでも付言しないかぎり、大学生の側は大学の奴隷状況をますます不満を募らせながら耐えるしかなくなってしまう。そもその始めから、そういう性質の発言を、大学生は聞いているのである。

その大学生の同じ耳に、雲の上から「大学間序列など気にしなくていい。そんなもの無意味なのだから」などと本気で言う人物がいるとしたら、恐らく、そういう人は自分の言ったとおり、学問を真面目にちゃんと修めれば、大学間序列など気にならなくなるとでも考えているのだろう。だが、21世紀を生きるライフ・スタイルを自らの力と知恵で創造する若者たちがほんとうの意味で気にしているのは大学間序列などではなく、それがいまだに問題にしようとする発想の古さであり、大学の体質の古さである。

阿部謹也氏の世間論を重要視し、ウォルフレンを熱く語る大学生、しかもパーソナル・コンピュータを使うビットの世界の住人には、その可能性に見合った話をしなければいけない。そして、その話は、その場で終わるような性質のものでもない。私たちは自由に議論する場を互いに求めていたのだ。こうして電子メールの同報通信による電子サロンが立ち上がることになった。

6. ガイダンスとは何か

こうして、電子サロンで大学に関することを中心にいろいろ議論が始まると、意外な発見の連続に目を回すほどなのである。具体的な行動なり発言なり、あるいは資料なりが存在している発見であるから、それはそれは面白い。調子に乗りすぎて電子メールを使う際のエチケット（ネチケット）を知らず、迷惑かけてしまったこともあった。

しかし、なぜガイダンスと電子メールによる自由な意見交換の場である電子サロンとがつながるのか？ 実は、私も最初、この2つがつながるものであるとの認識はなかった。ところが、母校の3年生とOBとで始まった電子サロンは、他学年へ、他大学へ、社会人へ、父母へ、高校生へと、読者を拡大してしまった。OBも含めると、すでに10大学を超えている。

そのような開かれた電子サロンで母校論を、私は展開した。私の母校は武蔵大学だが、そのよく知っているはずの武蔵大学が、途中から、分からなくなってきた。歴史的資料が発掘され、資料集の刊行が始まったこともあるが、事実と思われていたものが、伝説にすぎないことが明らかになったり、それはそれは、頭が忙しいことになった。

話が前後するが、独立戦争（シヴィル・ウォー）を戦う布陣として、B・フランクリンの『フランクリン自伝』を真ん中に据え、左右に新渡戸稲造の『武士道』と福沢諭吉の『福翁自伝』を配し

た。進軍はT・ペインの『コモン・センス』に始まり、F・L・アレンの『オンリー・イエスタデー』を経てバブル経済を考え経済学部を取り込み、現代を抜け、未来へと攻め込む。

さらに、『フランクリン自伝』からM・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』へとすぐ読み進めるから、経済学部から人文学部へ、人文学部から社会学部のように学部・学科を橋渡し統合してしまう、そんな作戦だった。情報の氾濫で互いに読む本がバラバラで、話が噛み合わない。これでは白けるから「学問と政治の話はしない」が大学生であることの最低のエチケットにまでなった、その学問的危機を、なんとか打開しようとしたのである（いままでは学問がしたい大学生は”隠れマジ”となったため切磋琢磨ができず、学問の連鎖反応、相乗効果が生まれ難かった）。

1年生が主体ではなかったがこの作戦がうまくいったとは思わないが、この中心に据えた『フランクリン自伝』が推薦入試で合格した場合、入学までに読んでおく本の中の1冊だったことから、推薦入試で入学することの苦悩が電子サロンに書かれることになった。留学生と帰国子女と並んで、推薦入学者が「ズルして大学に入った」かのような被害者意識をもっている事例については私個人は以前から知っていた。だが問題は、推薦入学の実態とその苦悩を具体的な文章で読める機会が大学生の場合、皆無である点にある。

要するに、知らないことが次々と明らかとなり、知っているつもりでも、こんなに知らないこと、気づいていなかったことだらけであるとする、そして、それらが知っていなければならなかったとすると、これでは大学生活が円滑に営めるはずがない。推薦入学することの苦悩とは、そんな性格のものだった。

メールを読んでから実際に会って議論をするので、話の前提が確保されている。いままで到達できなかった、次の話の、次の、そのまた次ぐらまでは容易に話が進む。ここまで深い話は学会でも、そう経験できるものではない。こういう、ほとんど未経験の話の深まりの中で、どうしても不思議に思うのは、「いったい、いままでガイダンスは、誰によって、どのように行われていたのか？」との疑問である。大学の情報公開というが、大学人自身が大学のことをよく知らない、ということがあるのではないか？ 大学に入学するとは、いったい、どういうことなのか？¹⁴⁾

これは、いわゆる情報公開の話ではない。なぜなら、質問に行くと、「やっと自分たちの仕事に関心をもつ人が現れた！」といった感じの丁重な応対を受ける。情報を公開していないのではなくて、関心をもってもらえないのだ。大学の授業にしてもそうで、担当者は真面目に授業をしているのだろう。しかし、人は夢なしには生きられないように、刺激も目的もなく無闇やたらに他者の仕事に関心を示すことはない。大学生であることの最低のエチケットが示すように、大学生間でも事情は同じである。

こうしてみると、成功している大学を除いて一般に、日本の大学には大学教育を成立させる際を中心になるべきものが存在していない可能性が出てくる。大学の魅力・可能性を発散する源、学部間の距離をなくし統合させる何か、講義が興味深く聴けるようになるための知的刺激、—これらはいろいろに工夫され、各授業、あるいは総合科目でも得られることになっているが、それで事足りているのだろうか？

電子サロンに身をおいていると、これらの不足というより欠如を疑う。いずれにせよ、電子サロンに、それらの不足を補うばかりか、大学教育を復活させる中心、大学の生命の泉たりうる可能性まで夢見てしまうのである。これは、いったい、どうしたことか？

7. 電子サロンの世界

この辺で電子サロンの世界を紹介しておく必要があるだろう。まだ半年あまりしか経っていないので、カオス状況からやっと抜け出したところである。しかし活発に議論に参加する中で、サロン・メンバーが互いの刺激を受け、連鎖反応に相乗効果が働いて大きく成長したのは間違いがない。その成長した1人に私も含まれている。

たとえば、9月にノート型パソコンを購入したが、同じ頃ノート型パソコンを購入した大学3年生と私は、同じ新卒OBの手ほどきを受ける兄弟弟子となり、ちょっとしたライバル関係にある。「年長者に負けられない」若者と「若者に置いてきぼりを食いたくない」中年という関係である。こうした良好な人間関係の中で選択されたパソコン関係の書物リストを提供されて読めば、これが面白く読める。パソコン音痴を自認していた私がパソコンを抵抗なく受け入れるようになっていたのである。

大学生のメンバーの場合も、同じようなことが起こっているらしい。いままで詰まらなかった講義が面白くなっていると聞いた。義務的に受講していたものが、積極的姿勢に転じているのだと思う。これは教育的な意味で言っているのではなく、大学生が教育を論じる客観的・相対化された視点から大学を、個々の大学の授業を“観る(テオリア)”ように授業参加しているためではなかろうか。

最近の電子サロンで、学問とは何か、その問題点は何かをめぐって、次のような意見交換があった。まず私が「学問はチーズのように切って学生に分け与えるようなものではない」といった見解を提出し、次のように議論が展開された。要約すると、—

学問とはその人がある状態になって始まる。「興味、関心を持つ状態」と「必要に迫られる状態」がそれで、いま電子サロンで問題になっているのは、その必要に迫られた学問の中でも、「緊急のもしくは生死に関わるもの」と「そうでないもの」のうち、後者に当たるものである。この「そうでないもの」を「興味、関心持つ状態」に持ち込めれば、それが問題解決の1つの道になりうる。

それでは、興味をもてないのはなぜかということを考えると、それは、その学問がその人の生活からかけ離れている、いや、今までに何の接点もなしにいきなり、やらざる得ない状況に追い込まれるからと考えられる。学問は、その人が育ってきた環境、様々なものへの遭遇、体験から実生活への応用までも含むのである。

ここでいったん切らせていただくが、こうした議論をすることの意味は、大学に進学しようと考えている受験生にこそ重要であるし、大学生には、むしろのこと必須である。学問が受験生および大学生と接点をもたずに、どうやって大学は大学教育によって存立しうるのか？

この疑問は問われなければならない。だが、どこで問えばいいのだろう。その場がなかったのである。電子サロンによって創造されたのは、そのような議論が自由にできる場なのである。

途中を省略して議論は、さらに続いて、—

実学を考えているのではなく、私は現実生活での体験が希薄であることを問題にしたい、とする。五感で感じる事、そして人と接触し涙を流し、笑い、喜怒哀楽をどれだけ繰り返すかが重要なのである。大学の学問は一見、これらのこととの接点が見えにくい。しかし、それを結びつけることが、その学問への取り組み方を変えるものだと考える。接点を見つける作業と自分を見つめ直すことが求められているのではないか。

電子サロンは論文集ではないので気楽に書き流すことになっているので、そのようなものとして読んでいただきたいが、大学生には、こういう堅い話を互いに交換し合う場がほとんどない。大学に関していろいろ疑問に思うことがあっても、議論する相手が見つからない。仕方なく本を読めば、大学こそ世間の牙城だったことに気づかされ、「これではどうにもならない！」というギリギリのところ電子サロンは立ち上がったのである。

さらに、このメールは別のメンバーによって、次のように話が発展した。

”学問とは”ということをよく考えて学校に来て授業を受けているわけではないが、実用的か、つまり自分と関わりがあるかとか、実益みたいなものを見出せるかどうかで学問をするのは不可能だろう。それは学問でなく訓練とか勉強になる。

以前のメールに、色々なものの構造は実はシンプルなのでは、というのがあったが、それを逆から考えると、様々な事柄(分野や形態にとらわれず)を知り考えていくことは、また違った事柄のものを考えるに当たってつながりをもたらせてくれるということになる。

わたしはこの大学で幸運にもこういうことを気付かせ、考えさせられる幾つかの講義や先生に会う事が出来た。それらはまるで、経済とはかけ離れたようなことであることが多かったが、知らないままでなくてよかったと思うことばかりである。そして随分あとになってそれが他の問題に取り組む上で生きてきたりすることはよくある。こういう流れとか、つながりみたいなものが、学問なのではないか。

このごろ就職活動のはなしなんかをよくするが、多くの人は英語が話せるようになったり、簿記が出来たようになったり、コンピューターがつかえるようになったりというスキルのレベルアップを重視している。これは会社で使える人間かどうかという点で大きな意味を持つが、それだけでいいのなら専門学校だっていいはず(学歴社会と世間論を無視した言い方だが)。

ひとつのものをそれだけとして捉えるのではないことは大学において得られることだと思う。いろいろなものをつながりを見つけ、つながった流れから自分の考えを発展させられる可能性はとても大きい。個というものはより強くなりえる。それは単独の作業や勉強からはなかなか生み出せない。だからメールで”接点”という言葉が大事なんだなと勝手に解釈した。

以上に紹介させていただいたのは、穏健派のメール2編である。電子サロンの立て役者には大学3年生のY君がいて、ゼミのテーマ、レポート、各種小論、合宿の日程、学会のシンポジウム情報、各種フォーラム情報、さらには『複雑系』など最新の学問情報と、ありとあらゆる情報が流される。ネチケットに関する問題も発生して、事態打開のため、電子サロンをメーリング・リストに移行させよう、ホーム・ページを開こう、という提案がメンバーからなされ、みんなでそれに取り組むことになった。

こうしてみると、大学教育のイメージが変わってくる。学問の成果を伝えるだけの大学教育は論外としても、大変革期にある大学教育の場合は、時代の変化への対応が大学生にこそ迫られている問題であることをもっと認識すべきではないのか。大学生が活躍する中で、時代に対応する。こういう理想を掲げるべき時なのではなからうか。学問論は押しつけるべき性格のものではないし、それ以前に学問自体が問われているのが現代だとすると、工夫を何か緊急に考えないわけにはいかない。

私たちの電子サロンが、その工夫たりえているのかどうかは将来の問題である。しかし、この電子サロンのようなものを創造すれば、いままで不可能と思われていたものが、意外に容易にできてしまう、というのは劇的な変化である。学問的雰囲気を高めたいなら、それを試みればいい。Y君にとっては、旧制高等学校の寮生活が果たした、談論風発の役割を現代に復活させる試みが、この電子サロンである。古きを温めながらも、停滞が許されない。ともかく、挑戦。21世紀前夜の大学の変貌は急である。

おわりに

パーソナル・コンピュータが誰にも身近なものになって、いままでの不足がいきなり吹き出した感がある。ホーム・ページをつくらうとすると、そこに乗せるべき内容に困る。発信する自分が何者であるかが、否応なく問われてしまうからである。

これから何者かにならなければならない若者は、終始、この問題を真剣に考え続けなければならない。だが、時代は、年齢差を無意味化した。いままで何者かであった者が、もはやその同じ何者かでは済まされない。時代に無縁かに見える職人へと目を向け、その何者かを求める姿は、決して若者だけのものではなくなった。

しかし人生のガイダンスは自らするしかない。果たして、この孤独を大学は希望に満ちた未来につなげうる場なのか？ それとも、しばしの間、この孤独を忘れさせてくれるだけの場なのか？ 知恵はどうした？ 仲間はどこにいる？

電子サロンは、こういう問題の全体を悩み、みんなで知恵を出し合って新しい時代を迎える準備を整える。結論を求めるのではなく、悩みを悩む、その自然な時間の流れの中で誰彼となくガイド・ラインを引くことだろう。みんなのために、そして自分自身のために。

(その実際は、<http://www.ask.or.jp/~kinji/>をご覧ください)

(以上)

【付記】 なお、DRAGON VALLEY How to lecture シリーズ全17巻（龍溪書舎）において、本稿は紙面講義の形で全展開を予定している。既刊の『大学の幕末を生きる－個性化と大学評価－』（第1巻）で、なぜこういう講義が必要なのか、その事態をスケッチ。同じく既刊の『いま開かれる大学－国際化と個性化の原点－』（第2巻）で教授者の立場から、まず今日、日本の大学が抱えた問題に分け入り、さらに第3巻では、講義というコインの表側を教授者の立場から描き、裏面を大学生の立場から描いて、『講義の聴き方－知的刺激とは何か－』（第3巻）という、従来、重要でありながら等閑に付されていた問題をトータルに考察して、大学を知的にスリリングな方向へと導く。執筆の基本的な姿勢は、日本の大学が悪いというより、日本の大学には欠けたもの、考察されていない問題が残っている、ということになるかと思う。

【注】

- 1) 松尾 欣治『大学って、どんなところ？』龍溪書舎、1985年。
- 2) 阿部 謹也『「世間」とは何か』講談社現代新書、1995年。
- 3) 阿部 謹也『「世間」とは何か』講談社現代新書、1995年、30頁。
- 4) 阿部 謹也『「世間」とは何か』講談社現代新書、1995年、176頁。
- 5) 阿部 謹也『「世間」とは何か』講談社現代新書、1995年、251頁。
- 6) 阿部 謹也『「世間」とは何か』講談社現代新書、1995年、215頁。
- 7) 松尾 欣治『国際化を前提とする個性化の条件』日本教育新聞社、1990年。
松尾 欣治『日本型大学の誕生』日本教育新聞社、1992年。
- 8) 阿部 謹也『「世間」とは何か』講談社現代新書、1995年、28頁。
- 9) Nicholas Negroponte, 福岡洋一訳『ビーイング・デジタル』アスキー出版 1995年、9頁。
- 10) Jean-Jacques Rousseau, 『社会契約論』桑原武夫・前川貞次郎訳、岩波文庫、1954年、15頁。
- 11) Jean-Jacques Rousseau, 『社会契約論』桑原武夫・前川貞次郎訳、岩波文庫、1954年、31頁。
- 12) Karel van Wolferen, 『人間を幸福にしない日本というシステム』篠原勝訳、毎日新聞社、1994年。
- 13) 浅羽 通明, 『大学で何を学ぶか』幻冬舎、1996年。
- 14) Wolf Wagner, Uni-Angst und Uni-Bluff — Wie studieren und sich nicht verlieren —, Rotbuch Verlag, Berlin, 1977年。邦題, 松尾欣治・川嶋正幸共訳『現代ドイツ学生気質』龍溪書舎、1984年。

